

日本遺産ものがたり

近世日本の教育遺産群



第5話

教育先進藩、学校を建てる

日本遺産に認定された「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」の歴史的魅力を語る「日本遺産ものがたり」。今回のキーワードは「学校」です。

江戸時代は、これまでになく多くの学校が建てられた時代であった。文字社会の広がりによって、多くの人々が読み書きを学び、さらに高い水準の教育を受けたいという者も少なくなかった。そうした人々の教育熱に応えるためにも、多くの学校建設が必要だったのである。

江戸時代前期に学校建設をリードしたのが、熱心に儒学教育を行った「教育先進藩」の藩主たちである。尾張藩の徳川義直は聖堂を、会津藩の保科正之は稽古堂を、水戸藩の徳川光圀は彰考館（日本遺産構成文化財）をそれぞれ建設し、教育の普及に大きな役割を果たした。

同じ教育先進藩である岡山藩の池田光政が、寛文10（1670）年に建設した日本最古の郷校、閑谷学校は、我が国の学校建築の中でも異彩を放つ存在だ。普通であれば、通学しやすい城下町に学校を建てるどころだが、閑谷学校は城下町から約32kmも離れた山奥に建っている。この人里離れた風光明媚な地に、光政は儒学教育の理想郷を見出したのである。

光政は、土木工事の名人として有名だった津田永忠に学校建設を命じた。永忠は主君の閑谷学校にか

ける情熱をくみ、工事現場に引越し、住込みで学校建設に当たった。こうして精魂込めて建てられた閑谷学校は、壮麗な講堂を中心に、孔子廟、文庫など、教育を受けるのに十分な建物が建ち並ぶ、当代随一の学校となった。さらに、維持費を賄うための専用の山林・田畑も備えられ、例え将来的に池田家が国替えや取潰しになっても、学校が自立して運営できるように配慮するほどの徹底ぶりであった。

閑谷学校をはじめとする、教育先進藩の学校建設は、町人や村人自らが師匠となり、学校を建てようとする機運を向上させた。そして、町人や村人が学校を建てる際、藩は原則として許可申請を求めなかった。そのため、江戸時代は、建てたい人が自由に建て、教えた人が自由に教えることができたのである。このような自由な教育環境は、当時の東アジア社会でも珍しいものであった。

こうした中、幕府官学、藩校、郷校、私塾、寺子屋といったさまざまな種類の学校が、全国津々浦々まで建てられるようになり、江戸の学びは大きく発展していくこととなった。

水戸市 歴史文化財課 関口慶久

日本遺産構成文化財 閑谷学校(岡山県備前市)

